

放課後等デイサービスの意義と課題 —職員と専門家の相談内容の分析・職員への質問紙を通して—

伊藤 真子* 竹内 康二**

本研究は、放課後等デイサービスで起こったいくつかの事例をもとに、テキストマイニングを使用し、現在働いている職員から専門家への相談内容の分析を行い、課題を明らかにすると同時に解決策にはどのような関連性があるかを明らかにすることを目的とした（研究Ⅰ）。また、現在働く職員へ質問紙での調査を行い、放課後等デイサービス事業の利点と課題を現場の意見から明らかにし、それらを検討することを目的とした（研究Ⅱ）。以上の研究Ⅰ・研究Ⅱから放課後等デイサービスの背景にある課題の検討をした。研究Ⅰの情報提供者は放課後等デイサービスに勤める職員から収集した自由記述による相談内容を研究目的で提供してもらい、手続きとして放課後等デイサービスの職員が専門家に相談した内容が示された文書（職員の相談内容と専門家の回答が含まれたもの）を29事業所から収集した。総事例数は42ケースであった。研究Ⅱの参加者は、放課後等デイサービスの同事業所で働く職員7名を参加者とした。2つの研究結果から、放課後等デイサービス事業の意義と役割は（1）第三の居場所（2）多種多様な障害に対してのサービス提供（3）地域に寄り添う事業であることが集約できた。一方、放課後等デイサービスの課題となるのは、（1）提供されるサービスの質の非統一性（2）専門家と現場との連携不足（3）人手不足であることが分かった。今後の研究として、第三者とのコミュニケーションに重点をおいた支援法をいくつか提案して、実際に放課後等デイサービスで効果があるのかの研究を行うべきである。また、専門家によるアドバイスをより身近にするための方法も、同時に検討することが求められるだろう。

キーワード：放課後等デイサービス, KH Coder Ver.beta.30e, テキストマイニング, 共起ネットワーク, 支援, 仕組み

近年、障害児者の利用が増加傾向にある放課後等デイサービスは、障害児の重度・重複化に伴い、多様な個別ニーズへの対応が従来に増して求められている。2007年には学校教育法の改定で特別支援教育が見直され、個別ニーズに応じた教育体制や環境整備が行われている。しかし学校教育だけで就学児の個別ニーズを充足させるのは困難で、放課後活動の場の整備の必要性が指摘されてきた。そして2012年には障害児支援強化の一環として児童福祉法と障害者自立支援法の一部が改定され、就学前後の障害児の保育・療育支援を担う児童デイサービスと重症心身障害児（者）通園事業が、児童福祉法下の未就学児を対象とする「児童発達支援」と就学児を対象とする「放課後等デイサービス」へと移行し、障害のある児童・生徒の保育・療育の場の整備が進められている。放課後等デイサービス事業部は学校教育との連携を図りながら児童・生徒

の成長・発達を支援することが期待されている。しかし課題として、放課後等デイサービスのガイドラインは検討下にあり、支援内容は事業所ごとに多種多様で、提供されるサービスの質に開きがあることが懸念されている。また学齢期の児童の放課後活動の場での成長・発達をサポートする環境整備上の基準がなく、建築計画分野からの指針を提示する必要があると考える（古賀, 2016）。

放課後等デイサービス事業所の定員は10人以上で、近隣の小学校や中学校、特別支援学校に通う児童・生徒が放課後または長期休暇に利用する。人員基準では児童・生徒5人に対して支援員が1人以上つき、設備基準は「指導訓練室」だけで広さや他の基準がない。また、放課後等デイサービスは、知的障害から肢体不自由、発達障害など、さまざまな障害に対してサービスを提供している。（古賀, 2016）。また、利用児童の年齢層も、他の日中一時支援サービス等との併用を含めれば、幼児期から高校生までの幅広い年齢層の子ども

* 明星大学大学院人文学研究科

** 明星大学心理学部心理学科

たちが利用しているのが現状である。

江上・田村(2017)より、放課後等デイサービスは障害のある子どもやその家族にどのような役割を果たしているかのアンケート調査を実施した結果、「サービス提供状況について」では、「サービス内容」を重視している家族が多く、サービス提供事業所との距離についても重視している家族が多かった。「スタッフへの信頼感・専門性について」では、「スタッフが信頼できる」という回答が高く、また、「子どもとよく関わってくれる」ことによって信頼度、サービスへの満足度が高くなっていることが確認できた。「お子さん自身の成長とその利点について」では、放課後等デイサービスが「子どもの社会経験を広げる」役割や、「多くの人との関わりが持てる機会」になっていること、「サービスを通して障害のあるお子さんについて理解し、支えてくれる人が増えた」と考える家族も多いことがわかった。放課後等デイサービスの利用は、家族支援の視点や専門的な療育の枠組みを超えて、障害のある子どもたちの社会経験や人間関係、社会における理解を広げる役割を実感・期待している家族が多いことが確認できた。

しかしその一方で山本(2015)は、放課後等デイサービスの課題について、事業は小中高生を対象としているが、実際の登録児は小学校が半分以上を占め、中高生の参加が少ないと指摘している。中には高校生を対象としていない事業所もあり、中高生の行き場がなくなっている可能性が示されている。逆に、小中高生を受け入れている場合も、年齢層があるために、一人ひとりにあった活動内容を保障することが困難であること、下校時間の差から集団での活動が難しいこと等の問題が挙げられている。加えて子どもの障害の幅が広いことは、発達段階に合わせた活動を作ることを難しくしている。そこには、制度の職員配置基準の問題が絡み、子ども10人に職員2人という基本的配置基準では十分な支援が行えず、さらには重度の子どもの利用制限にもつながることが示唆される。

このことから、本研究では上記で述べた放課後等デイサービスの背景にある課題の検討を行う。研究Ⅰでは放課後等デイサービスで起こったいくつかの事例をもとに、放課後等デイサービスでの課題の調査と検討を行う。具体的には、テキストマイニングを使用して放課後等デイサービスで働く職員から専門家への相談内容の分析を行い、課題を明らかにする。また同時に解決策にはどのような関連性があるかを明らかにすることを目的とした。研究Ⅱでは放課後等デイサービス

で働く職員へ質問紙での調査を行い、放課後等デイサービス事業の利点と課題を現場の意見から明らかにし、それらを検討することを目的にした。

研究Ⅰ

方法

(1). 情報提供者

放課後等デイサービスに勤める職員から収集した自由記述による相談内容を研究目的で提供してもらった。

(2). 手続き

放課後等デイサービスの職員が専門家に相談した内容が示された文書(職員の相談内容と専門家の回答が含まれたもの)を29事業所から収集した。総事例数は42ケースであった。

(3). 分析方法

テキストマイニング

自由記述文のデータの解析には、樋口耕一による内容分析システムKH Coder Ver.beta.30eを用いた。得られたデータは、記述を形態素に分解した後、自由記述内容から頻出語150語の抽出を行った。その後頻出語150語の中での最小出現数(相談内容は5回、アドバイスは6回)以上の共起の程度が強い語を線で結んだネットワークを作成した。また、共起ネットワークの共起関係の描画数はどちらも120個とした。

結果

相談内容をKH Coderを用いて抽出語における頻出語150語の分析結果を表1に示した。また専門家によるアドバイスの頻出語150語の分析結果を表2に示した。表1から相談内容は「本人」が46回で最も多く、続いて「多い」が40回、「言う」が37回であった。また、「指導員」、「対応」、「トレーニング」といった職員や保護者自身に関する相談単語がいずれも出現回数が22回以上であった。一方、表2から専門家のアドバイスは「活動」が72回で最も多く、続いて「子ども」が56回、「良い」が42回であった。また、「活動」、「言う」、「行動」といったコミュニケーションツールに関する単語がいずれも出現回数が35回以上であった。

この抽出語を基にした相談内容の共起ネットワークを図1に示し、専門家のアドバイスの共起ネットワークを図2に示した。共起ネットワークは、出現数が多いほど字が大きく、円も大きい(樋口, 2013)。また、線で繋がれている円と円は共起が強く、線が繋

がっていないければ円同士が近くても共起ではない（樋口, 2013）。加えて、円の色分けは比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けをしており、背景が白で、丸い囲み枠が黒色であれば、他の語とグループを形成していない単独の語であることを意味している（樋口, 2013）。

図1によると、頻出語150語で上位3語に位置していた、「本人」「多い」「言う」は「本人」を真ん中にして共に「本人」と重なりあっていたが、線は繋がりがあっていなかった。加えて、出現回数14回である「方法」という語は、「知る」との線の繋がりがあり、「知る」は「無い」との線の繋がりがあった。全体としては、流れを持つネットワークはいくつか存在するが、単独や23語でひとかたまりになっているネットワークも多く存在していた。一方、図2によると、頻出語150語で上位に位置していた、「良い」と共起の語が無く、また、「活動」、「子ども」は共起ネットワークに語はなかった。加えて、出現回数7回である「期待」という語は「親子」、「効果」、「考える」、「接触」、「自然」、「減る」、「増える」との線の繋がりがあった。全体としては、所々、単独や23語でひとかたまりになっているネットワークが存在していたものの、ほぼ1つの流れをもつネットワークであった。

表1 KH Coder による最頻出語と回数 (相談内容)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
本人	46	話	12	普通	7
多い	40	気持ち	11	母	7
言う	37	距離	11	本	7
指導	34	今	11	妹	7
教室	33	人	11	落ち着く	7
出来る	33	伝える	11	アドバイス	6
行動	31	お母様	10	キス	6
時間	29	家庭	10	トラブル	6
自分	28	帰る	10	外	6
見る	27	気	10	学習	6
言葉	25	行く	10	活動	6
他生	25	使う	10	顔	6
対応	25	受ける	10	起こす	6
難しい	25	少し	10	嫌	6
母親	23	状態	10	子供	6
トレーニング	22	職員	10	指摘	6
出る	21	相談	10	取り組む	6
過ごす	20	発	10	生徒	6
学校	20	スタッフ	9	切り替え	6
教える	17	家族	9	早い	6
発言	17	害	9	大きい	6
友達	17	関わり	9	飛び出す	6
声	16	関係	9	無い	6
他	16	先生	9	名前	6
入る	16	提案	9	来所	6
家	15	遊び	9	お母さま	5
強い	15	来る	9	ゲーム	5
参加	15	隠す	8	違う	5
手	15	今後	8	一緒	5
不安	15	最近	8	学年	5
物	15	出す	8	関わる	5
子	14	相手	8	近い	5
思う	14	増える	8	見せる	5
宿題	14	態度	8	困る	5
聞く	14	反抗	8	思い通り	5
方法	14	暴れる	8	施設	5
暴言	14	目立つ	8	持つ	5
様子	14	お子さん	7	自身	5
アプローチ	13	パニック	7	書く	5
感じる	13	以前	7	尋ねる	5
泣く	13	会話	7	生活	5
勉強	13	回答	7	祖母	5
利用	13	拒否	7	息子	5
良い	13	姿	7	他者	5
苦手	12	指示	7	知る	5
支援	12	場合	7	直す	5
児童	12	前	7	投げる	5
自由	12	促す	7	当初	5
注意	12	入れる	7	特定	5
遊ぶ	12	非常	7	内容	5

表2 KH Coder による最頻出語と回数（アドバイス）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
活動	72	繰り返す	12	目的	8
子ども	56	作る	12	与える	8
良い	42	徐々に	12	要求	8
言う	40	友達	12	離れる	8
本人	38	カード	11	トレーニング	7
時間	36	スタッフ	11	ネガティブ	7
行動	35	ルール	11	異なる	7
自分	35	効果	11	一つ	7
注意	33	促す	11	感じる	7
不安	31	様子	11	期待	7
必要	30	記録	10	求める	7
教室	28	強迫	10	興奮	7
言葉	28	考える	10	鏡	7
方法	28	場面	10	具体	7
見る	25	職員	10	見える	7
人	24	声	10	支援	7
問題	24	説明	10	自己	7
誉める	23	大切	10	自然	7
子	21	特定	10	受ける	7
他	20	内容	10	集団	7
大人	20	判断	10	少ない	7
指示	19	母親	10	生活	7
相手	19	確認	9	前	7
伝える	19	簡単	9	避ける	7
影響	18	距離	9	本	7
強い	18	教える	9	来る	7
手	18	見せる	9	落ち着く	7
対応	18	見つける	9	すべて	6
話	18	減る	9	引く	6
可能	17	作成	9	価値	6
質問	17	児童	9	家庭	6
書く	17	場	9	課題	6
関係	16	接触	9	我慢	6
起きる	16	答える	9	解消	6
傾向	16	分かる	9	環境	6
表現	16	理解	9	気持ち	6
保護	16	話す	9	好き	6
回避	15	応じる	8	攻撃	6
感情	14	家	8	告知	6
持つ	14	家族	8	紙	6
示す	14	機会	8	集中	6
障害	14	嫌	8	少し	6
入れる	14	今	8	症状	6
発言	14	指導	8	上手い	6
不満	14	助ける	8	場所	6
一緒	13	状態	8	親子	6
考え	13	先生	8	体験	6
参加	13	相談	8	態度	6
使う	13	増やす	8	丁寧	6
変化	13	不適切	8	停止	6

考 察

(1). 頻出語 150 語について

相談内容の頻出語 150 語で多かったのは、出現回数 46 回で「本人」であり、次に多かったのは、「多い」が 40 回、「言う」が 37 回であった。「本人」が多いということは、相談内容において子ども自身の問題が多く挙げられていたことがわかる。しかし、「指導員」、「対応」、「トレーニング」といった職員の悩みや保護者方の相談に関する単語が、いずれも出現回数が 22 回以上であった。このことから、子どもの問題について職員や保護者方の対応の困難さを専門家に相談することが多いことが考えられる。

アドバイスの頻出語 150 語で多かったのは、出現回数 72 回で「活動」であり、次に多かったのは、「子ども」が 56 回、「良い」が 42 回であった。「活動」が多いことから、専門家はアドバイスをする上で、子どもの活動や職員・保護者の活動など問題点の解決策として「活動」を重要視していると考えられる。また、「活動」同様に「言う」、「行動」といったコミュニケーションツールに関する単語が、いずれも出現回数が 35 回以上であったことから、相談内容に対する解決策として子ども同士や職員などの第三者とコミュニケーションを取ることが改善に繋がるのではないかと考えられる。

(2). 共起ネットワークについて

図 1 から、頻出語 150 語で出現回数が上位 3 語であった「本人」「多い」「言う」はどれも繋がる線はなく、全て単独の語であった。このことから、この 3 語はどの職員も多く使っているが、1 つ 1 つの相談内容にばらつきがあり、関連性がないと判断されたため、単独の語になったのではないかと考えられる。また、全体的にも他の語とグループを形成していない単独の語や 2.3 語でひとかたまりになっているネットワークも多く存在していたことから、相談内容にばらつきがあり、一貫性がなかったと考えられる。つまり、問題提起でも述べているように、子どもの障害特性や環境、施設などの違いにより「多種多様」であることから、相談内容にはばらつきがあり、関連性はあまりないということが言えるのではないかと考える。そして、出現回数 14 回である「方法」という語は「知る」との線の繋がりがあり、「知る」は「無い」との線の繋がりがあったことから、多くの職員は問題解決の方法を知らずに、対応に困っていることが共起ネットワークから読み取れた。

一方、図 2 から頻出語 150 語で出現回数が上位 3 語であった「良い」は繋がる線は無く、単独の語であった。このことからアドバイスをする上で、専門家はほぼ全てのケースにおいて「良い」を用いたため、共起する単語が見つからなかったと考えられる。また「活動」、「子ども」は、共起した語が様々であったため、共起ネットワークの図に示されなかったと考えられる。加えて、出現回数 7 回である「期待」という語は「親子」、「効果」、「考える」、「接触」、「自然」、「減る」、「増える」との線の繋がりがあったことから、専門家によるアドバイスによって、期待される結果が広範囲に繋がることを意味しているのではないかと考えられる。図 2 全体としては所々、単独や 2.3 語でひとかたまりになっているネットワークが存在していたものの、ほぼ 1 つの流れをもつネットワークであったことから、専門家による相談内容の解決策は子どもの障害特性や環境、施設などに関係なく一貫性があると言えるのではないかと考えられる。

(3). まとめ

以上のことから、放課後等デイサービスでは多種多様な問題（子どもの問題行動、職員や保護者方が行う対応の困難さ等）があり、職員は支援法に困っているのが現状である。それに対して、支援法はどの問題においても、子ども同士や職員などの第三者とのコミュニケーションに重点をおいた手法を中心として支援を行うことで、様々な解決への期待がもてる。よって、職員がやらなければならない対応や方法には、一貫性があるのではないかと考えられる。

研 究 II

方 法

(1). 参加者

放課後等デイサービスの同事業所で働く職員 7 名を参加者とした。

(2). 手続き

参加者に、放課後デイサービスの特徴についての利点と課題を、自由記述形式で計 4 問回答してもらった。記述するにあたり、参加者には、「回答方法は記述式で枠を取っておりますが、入りきらない場合は枠を拡大して回答して頂いて構いません」、「質問の内容で回答しにくいことがありましたら、回答できる範囲でお答えください」の 2 点を伝えた上で行った。質問紙の内容としては以下の 4 項目で行なった（表 3）。

表3 放課後デイサービスの特徴についての質問文

①利用している子どもの年齢層が広いことについての、利点と問題点はありますか？
②子どもの障害の種類や学力レベルが多様であるなかで活動することについての、利点と問題点はありますか？
③個別でも大集団でもなく、小集団の活動が原則であることについての、利点と問題点はありますか？
④小中学校などに比べて、活動内容や指導内容を自由に設定できることについての、利点と問題点はありますか？

結 果

記述してもらった自由記述形式の質問紙の回答を表4に示した。なお、研究対象者へのプライバシーの配慮として、自由記述内容で研究対象者が特定できないように一部文章を変更した。

表4より全体としては、人によって文章の長さは異なっており、1つの質問に対して回答が1行の職員もいれば、回答が4行以上の職員もいた。そして、利点の質問よりも問題点の質問の方が、「思い当たらない」や無記入率が高かった。部分的に見ると、「利用している子どもの年齢層が広いことについての、利点と問題点はありますか？」という質問の利点として、兄弟がいない人たちも放課後等デイサービスに通うことで、異年齢かつ幅広い世代と関わるので、コミュニケーションの幅が広がるという意見が多かった。

一方、問題点では子ども達自身の問題点は少なく、レベル差を合わせるのが難しかったり、トレーニング内容の難しさなど職員としての問題点が多かった。「子どもの障害の種類や学力レベルが多様であるなかで活動することについての、利点と問題点はありますか？」という問いにおいて、利点は様々な子ども達と関わる事が出来るので、子どもの成長に良い影響を与えたり、コミュニケーション能力が上がるという意見が多かった。一方、問題点では指導者がトレーニングの課題や進め方、トレーニング最中に困難を感じる意見が多かった。「個別でも大集団でもなく、小集団の活動が原則であることについての、利点と問題点はありますか？」という問いに対しては、利点として小集団ならではのメリットが多くあり、指導者の人員数と子どもたちの数を考えた時のベストな状態だと述べている人もいた。しかし、小集団は問題が起こった時の対応のしづらさや子どものレベル差によるトレーニ

ングのしづらさが多く挙げられた。「小中学校などに比べて、活動内容や指導内容を自由に設定できることについての、利点と問題点はありますか？」として、利点では利用者ひとりひとりの状態に合った活動やトレーニングを設定できるため、楽しく活動できることを利点に挙げていた。また、事業所ごとに様々な特色を持つことが多くなっている。そのため、保護者のニーズに合う事業所を選択しやすくなっているというように、保護者にとっての利点も挙げられていた。しかし問題点として、職員は利用者に合わせて毎日違う内容、毎週違うテーマのトレーニングを考えるため、その難しさや負担を述べていた職員が多数いた。また、活動内容が不透明で、事業所によって活動内容にばらつきがあり、行政が舵をとって事業所の特色や活動内容をオープンにしていくことが必要であると感じている職員もいた。

表4 質問紙における職員の回答

	利点	課題
問題①	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢層が広いことでコミュニケーションに多様性生まれる。小さい子は話題についていけない、大きい子のコミュニケーションで観察学習の機会になる。大きい子は小さい子の面倒を見る機会が増え、自分だけでなく人の世話をする貴重な機会になる。また年齢が高くても知能が低い場合は、年少のお友達とのコミュニケーションを楽しむことができる。 ・気兼ねなく幅広い年齢の人と関われる事。小中高が集まる場所では中々無いため、低学年は高学年を模範と見て、高学年は低学年の手伝いをする事で自信につながる等様々な場面で利点がある。 ・コミュニケーションの幅が広がり、小さい子は学び、大きい子は教えるという相互のつながりも生まれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際のところは、コミュニケーションをとるのが難しい場合が多い。 ・レベル差を合わせるのが難しい。放課後デイサービスでは、皆同じ内容に取り組むため、合理的な配慮を考えトレーニングを行う必要がある。 ・それぞれ年齢層に合わせたトレーニング内容の言語が難しい。
問題②	<ul style="list-style-type: none"> ・レベルに応じた役割分担ができること。お互いを認め合う心を育むことができる。 ・様々な障害を持った友達と関わるということは、多様な人間と関わるということ。多様な人間と関わることはコミュニケーション力を育む上でとてもメリットになると思う。 ・理解度が低い子たちが、分からない時に「教えてください」「今のどういう意味」と聞くことの練習にもなる。逆にわかる子が周りに教えることもある。 ・様々な個性の集まる環境で過ごすことで、お互いの理解が深まり、「みんな違ってみんないい」ということの理解に繋げることが出来る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学力レベルが多様だと、どうしても学齢の低いお子さんにはトレーニングのレベルを合わせなければならなくなる。そのため学齢の高いお子さんはトレーニング内容をつまらなく感じることもある。 ・障害の種類や学力また知力の差から、相手を馬鹿にする行為や言葉を出す子もいる。何が良くても何が正すべき事を繰り返し伝える中で不適切行動が抑えられる等成長を感じることがある。 ・トレーニングの課題や進め方を決めるときに悩む。また内容の難度設定が難しい。 ・情緒面に課題のある子どもが多くなると、お互いに刺激し合って落ちていくことが難しくなる場合がある。
問題③	<ul style="list-style-type: none"> ・個別よりも、集団における課題発見がしやすくなる。大集団より、きめ細かな対応が可能。大集団では課題のあるお子さんは集団から漏れてしまい学ぶことが嫌になっってしまうかもしれない。だが集団は個別では得られないものを学ぶことができるという点もある。 ・スタッフの人数と子どもたちの数を考えた時、ベストな状態で療育が行える事。障害の特性や性格など機々だが、約6～8人がそれぞれの子どものを詳しく見る事ができると私は考えている。また、グループにならず全体で関わり合いができる人数である。 ・埋もれることなく、目が届く集団であることによってコミュニケーションが生まれ、子どもの様子も把握しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発達に課題のあるお子さんがほとんどなため、集団で学ぶ前に個別で力をつける必要があるお子さんが多い。 ・各日で人数が変化するため人員配置が難しい事。いつ誰が何人来るのかをスタッフ全員が把握し、その日に合った人員配置を事前に考えている。イレギュラーも多い分、状況に合わせてスタッフの出動を決めている。 ・学習支援など、支援の内容によっては個別に対応した方が効果的なこともあるかもしれない。 ・大集団では見えていなかった刺激が見えるようになってしまう。
問題④	<ul style="list-style-type: none"> ・置いてきぼりの子どもが生まれにくく、どの子どもも、ある程度の達成感を持ちやすい。 ・その日来る子に合ったプログラム作成ができる事。様々な目標や課題に対応出来る強みがトレーニングにはある。自由だからこそ楽しませ方も内容の意図も細かく設定しなければいけない。 ・勉強ではなく、他者とのコミュニケーション作りや日常生活に必要なスキルを身につける為に多様な方法を取れる。 ・事業所ごとに様々な特色を持つことが多くなくなっているの、保護者のニーズに合う事業所を選択しやすくなっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・その時々で子どもにとって何が最善の学びになるかを考える必要があるのでトレーニングを独自に考える分職員に負担がかかりやすい。 ・能力や学齢の差は、内容の難度設定が難しい。 ・活動内容が不透明で、預かってDVDを見せているだけといった事業所の中には存在するため、行政が舵をとって事業所の特色や活動内容をオープンにしていけることが必要。 ・学校の活動内容とあまりにかけ離れたり、連携ができていないと、子供にとって負担になってしまうことがある。

考 察

結果から言えることは、「個別でも大集団でもなく、小集団の活動が原則であることについての、利点と問題点はありますか？」という質問に対して、小集団はトレーニングを行う際、最善のやり方であると感じている人が多かったが、その分小集団ならではの問題点も多く挙げられたため、指導員の負担が多いように感じられた。そして、「小中学校などに比べて、活動内容や指導内容を自由に設定できることについての、利点はあるですか？」という問いの中で、ある職員が利点として「事業所ごとに様々な特色を持つことが多くなっているので、保護者のニーズに合う事業所を選択しやすくなっている」、問題点として「活動内容が不透明で、預かってDVDを見せているだけといった事業所も中には存在するため、行政が舵をとって事業所の特色や活動内容をオープンにしていけることが必要」と述べていた。これは、問題提起で挙げた、放課後等デイサービスのガイドラインは検討下にあり、支援内容は事業所ごとに多種多様で提供されるサービスの質に開きがあることが懸念されている（古賀, 2016）ことに当てはまる。よって、サービスの質に開きがある問題点を、上手く行政と連携をとれば改善の見込みがあるのではないかと考える。そして、事業所ごとに様々な特色を持つことは、子どもや保護者にとっては利用しやすいという、放課後等デイサービスの利点として考える人も増えるのではないかと。

総合考察

(1). 放課後等デイサービスの意義と役割

研究Ⅰから、職員が専門家に相談した内容として、子ども自身の問題が挙げられていたが、それ以上に職員の悩みや保護者方の相談に関する内容も多く挙げられていた。つまり、職員は子どもの問題に対して、職員自身が行わなければいけない対策や対応を専門家に相談する事例が多かったことがわかる。多かった理由としては研究Ⅱからわかるように、職員は放課後等デイサービスの役割として、気兼ねなく幅広い年齢の人と関われる事で、コミュニケーションに多様性が生まれる環境であると考えている。つまり子どもや保護者にとって、第三の居場所として機能してほしいと思っているのではないかと考える。また子どもの成長を手助けすることができたり、職員自身がトレーニングを考える事によって活動内容が広がり、子どもの次のステップにつなげられる。そして、利用者の課題に合っ

たトレーニングを行うことができるため、楽しく学ぶことができる。その他にも勉強ではなく、他者とのコミュニケーション作りや日常生活に必要なスキルを身につける為に多様な方法を取れると考えていることがわかった。そういった役割が放課後等デイサービスにあると考えている職員が多いからこそ職員自身がどうすればいいかと専門家にアドバイスを求める相談内容が多いのではないだろうか。また放課後等デイサービスを、「障害のある子どもにとって大事な居場所にしてあげたい」、「少しでも放課後等デイサービスで学んだことを学校や社会で活かしてほしい」、「学校で学べないことを学んでほしい」といった職員の思いが込められているのではないだろうか。研究Ⅰ、研究Ⅱからわかったように、放課後等デイサービスの職員は誰よりもこの環境・施設を大事にして、子どもやご家族に寄り添い、手助けをしたいという気持ちを強くもっている。そのため、放課後等デイサービスの職員は信頼ができ、子どもとよく関わってくれることから、保護者からの信頼度、サービスへの満足度が高くなり（江上・田村, 2017）、近年では障害のある子どもをもつ家族による利用需要が増加しているのではないだろうか。

(2). 放課後等デイサービスの課題

放課後等デイサービスのガイドラインとして、支援内容は事業所ごとに多種多様で、提供されるサービスの質に開きがあることが懸念されている（古賀, 2016）。本研究からもわかるように、研究Ⅰのテキストマイニングの結果から、相談内容にばらつきがあり、一貫性がないと考えられる。また研究Ⅱの質問紙から、トレーニングはその事業所の職員が、毎日違う内容、毎週違うテーマでトレーニングを考えるため、それに時間が掛かり子どもと関わる時間が少なくなる。そのため、能力や学齢の差などによって、トレーニング内容の難度設定が難しいなど支援内容が決められていなく、多種多様であることは職員にとって、負担が大きいのではないかと考えられる。また、活動内容が不透明で、預かってDVDを見せているだけといった事業所も中には存在するなど、実際に提供されるサービスの質に開きがあることが述べられている。つまり放課後等デイサービスは、現在幅広い年齢層の子どもたちが利用しているため、様々な問題が起こる。そのため、支援内容が多種多様になってしまい、マニュアルでは対応しきれないため、職員にトレーニング内容を任せているのが現状である。それにより、施設や環境、職員等の要因が原因となり、提供されるサービスの質が開いてしまう。しかし、サービス提供状況については「サー

ビス内容」を重視している家族が多いため、この厳しい現状の中でも、子どもにとって心地良い居場所として機能する事を職員は心がけているのだろう。これは、職員にはかなり負担と不自由さを感じさせているのではないだろうか。よって今後は、研究Ⅰで明らかになった、第三者とのコミュニケーションに重点をおいた支援法を考えるべきなのではないかと考えている。また、サービスの質をなるべく開かせないために、様々な事業所との連携を取り、情報交換のできる環境を作ってあげること、また専門家が放課後等デイサービスに寄り添い、常にアドバイスすることができるサービスを多く広める必要がある。よって、今後は第三者とのコミュニケーションに重点をおいた具体策をいくつか提案して、実際に放課後等デイサービスで効果があるのかの研究を行うべきである。また、専門家によるアドバイスをより身近にするための方法も、同時に検討するべきである。

その他にも、山本（2015）から放課後等デイサービスは年齢層があるために一人一人にあった活動内容を保障することが困難、下校時間の差から集団での活動が難しい等の問題が挙げられている。加えて子どもの障害の幅が広いことは、発達段階に合わせた活動を作ること難しくしている。研究Ⅱからも、利用している子どもの年齢層が広いことは、子どもにとっても、職員にとっても多く問題点が挙げられ、放課後等デイサービスの課題となっている。また、子どもの障害の種類や学力レベルが多様であるなかで活動することについては、多くの職員がトレーニングの内容設定の困難さを訴えていた。そこには、制度の職員配置基準の問題が絡み、子ども10人に職員2人という基本的配置基準では十分な支援が行えないことが示唆される（山本、2015）。研究Ⅱで「個別でも大集団でもなく、小集団の活動が原則であることについて」に聞いた際、少人数によって集中できる子どもが多く、集団であるからこそコミュニケーション能力の向上につながるなど小集団ならではの利点が多く挙げられた。また、スタッフの人員数と子どもたちの数を考えた時、ベストな状態で療育が行えるのは、約6～8人がそれぞれの子どもを入念にサポートすることができると考えている職員もいた。一方、日で人数が変化するため人員配置が難しいという問題点もある。そのためいつ誰が何人来るのかをスタッフ全員が把握し、その日に合った人員配置を事前に考えている。放課後等デイサービスの特徴でもある小集団は、子ども達にとってベストな状態ではあるが、放課後等デイサービスでは子どもが

多種多様で、特に発達に課題のあるお子さんが多い。なので、職員が多ければ集団で学ぶ前に個別で力をつける必要があるお子さんは個別指導を行ったり、イレギュラーに対応できるため、職員が増えることで、放課後等デイサービスの活動の幅が増えるだろう。よって、人手不足は今後の課題になるだろう。

(3). まとめ

以上の考察から、放課後デイサービス事業の意義と役割は以下のように集約ができる。①第三の居場所②多種多様な障害に対してのサービス提供③地域に寄り添う事業である。

一方、放課後デイサービスの課題となるのは、以下のように集約できる。①提供されるサービスの質の非統一性②専門家と現場との連携不足③人手不足である。

引用文献

- 内川 治・川嶋敦子・磯崎幸子（2012）SPSSによるテキストマイニング入門 株式会社オーム社
江上瑞穂・田村光子（2017）放課後等デイサービス利用者のニーズについての検討ーアンケート調査の結果と考察からー 植草学園短期大学研究紀要、18、37-45
古賀政好（2016）放課後等デイサービス事業所の活動実態と環境設定の効果の検証 日本建築学会技術報告集、50、231-236
樋口耕一（2013）KH Coder Manual KH Coder 2013年10月29日 <<http://khc.sourceforge.net/dl.html>>（2012年11月22日）
山本佳代子（2015）障害のある子どもの放課後活動における制度化の展開 西南女学院大学紀要、19、79-88

*The significance and challenges of after school day service
-Analysis of the consultation contents of the staff and experts・Through
a questionnaire to the staff-*

MAKO ITO (GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES, MEISEI UNIVERSITY)

KOJI TAKEUCHI (DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY, SCHOOL OF PSYCHOLOGY, MEISEI UNIVERSITY)

MEISEI UNIVERSITY ANNUAL REPORT ON PSYCHOLOGICAL RESEARCH, 2019, 37, 13—24

Key Words : after school day service, KH coder, Text mining, Cooccurrence network, support, structure